

友愛

15周年記念

特別号



世界平和にとって、もっとも基本的なものは、世界の市民の相互理解と友愛である。

それは国の政策によってではなく常に市民たちの発意と実践によってのみ達成されるだろう。

ワールド・フレンドシップ・センター

ワールド・フレンドシップ・センターとは？

目的……国際理解と友情を深め、恒久平和をめざす。又広島・長崎の被爆者に援助を行う。

歴史……1962年バーバラ・レイノルズは2人の若い被爆者を伴って世界平和巡礼を遂行。さらに、1964年バーバラの指導のもとに26人の被爆者と12人の通訳グループは、世界平和巡礼使節団として世界中をまわった。1965年8月バーバラは、この平和運動を組織的に発展させるためW. F. C. を創設した。現在の理事長は原田東岷。

- 活動……
1. 日本や外国の旅行者に安い宿泊所を提供し、広島の世界平和運動や被爆者の問題を理解してもらうためにW. F. C. やその他の団体の人々と接触する機会を世話する。
 2. 原爆病院や養護ホームを訪問して奉仕活動をする。
 3. 月1回フレンドシップナイトを開き、ゲストスピーカーのお話や映画・スライドを使ったりして様々な社会問題の討論会ないし研究会をもつ。
 4. W. F. C. の会員で構成されている翻訳グループがあり、広島・長崎に関する資料を英訳して米国ウィルミントン大学にある広島・長崎記念文庫に送っている。
 5. 米国との間で教師（学生）交換プログラムを行っている。
 6. 機関紙「友愛」を和英文でそれぞれ年4回発行している。
 7. 毎週英会話クラスを主催
 - 婦人クラス
 - 一般クラス
 - 中・高校生クラス
 8. W. F. C. は内外の平和団体と密接な連絡をたもち協力しよう。

十五周年記念
 へ友愛へ特別号

目次

ワールド・フレンドシップ・センター (WFC)の15年	原田 東 限	2
ワールド・フレンドシップ・センターの 日々を振り返って	バーバラ・レイノルズ	9
愛は憎しみよりも強し	クレアランス &メアリー・ボーマン	12
小さな友情の架け橋	アレン・ディーター	14
日本の皆さんへ	リーランド・ウィルソン	16
WFC館長としての追憶と希望	関 屋 正 彦	17
私達の人生の ハイライト	エルシー & ゲルストン・マクニール	18
WFCにおける私達の活動	グレース & スー・ホー・ハン	19
聞くべき声	アイラ & メーベル・ムーモウ	21
日本で的一年	レオナ・ラウ・エラー	22
WFCでの私の経験	モーリン・パーカー	23
教師交換計画に参加して	フローレンス・デイト・スミス	25
WFC理事会名簿		26

世界に平和

清水 三子



W F C の十五年

W F C 理事長 原田 東 岷

はじめに

原爆で壊滅した広島の地に、被爆後二十年目にワールド・フレンドシップセンターが生れ、それが十五年存続し、そして多分将来も存続或は発展して行くであろうということは、客観的に見て、大変興味深いことではないだろうか。それは多分、バーバラ・レイノルズという一人の天才的なキャラクターが広島に生活したと言ふ一つの偶然と、そのあとを継ぐ多数の米國、英國、日本の平和人の献身があったためであるが、その人達を鼓舞した「ヒロシマ」の事実と、そこに息づく「ヒロシマ市民」という土壤がなかったら、何物も生れはしなかったかも知れない。

一九六五年八月七日、即ち被爆二十周年の祈念式典の翌日、広島市鞆町の鐘景園(旧淺野公の日本庭園)に於て、バーバラ・レイノルズは、前日の式典に参加した外国平和活動家約二十名を含む八十数名の友人参会の下に、W F C の成立を宣言したのであった。そして、自身は *resident*、*director* 兼 *secretary* となり、数名の日本人理事が指名され、当日その席に居なかった私が理事長に指名された(私はその夜、一年だけの約束でそれを引き受けたが、十五年後の今日も、その席を汚し続けている。)

W F C の誕生

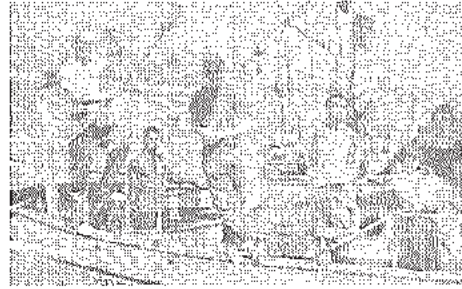
W F C の組織は、稍奇妙である。非常に長文の設立趣意書を兼ねた、事業目的の書類は存在するが、会の規約というものは存在しなかったのである。会に集るものはすべて会員であり、役員であった。初めの五年間は会費の規定もなく、すべてが寄附で賄われた。それも主として、バーバラの友人であるスポンサーからのものであった。バーバラの意見によれば、広島市民から会費などを吸い上げるということは犯罪的な行為に等しかったのである。

センターの本拠は、広島市西区南観音町(広島市西南部)に位置し、慈恵の間に建てられた二軒の民家が、それに当てられた。ここは数年前からクエーカー教団から売却されたフランセス・ロスが、フレンドシップ・センターVの妻札をかけて活動していたのであるが、その当時、アメリカに帰国する準備をしていたのを、そのまま借り受けたのである。そして五十センチほどの板に、ワールド・フレンドシップセンターと片仮名で縦に書いたものが看板兼表札となり、別に1-4ほどの大きな横書きの英文表札も懸けられた。

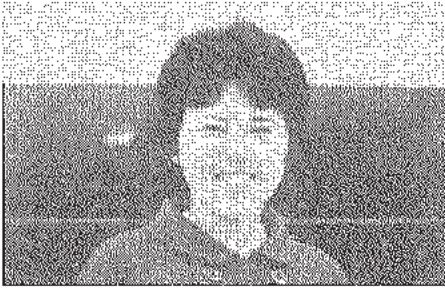
この様に、小さな二軒の日本家屋を本拠としてこの壮大な名のもとに世界平和への活動を開始したのである。基金はバーバラの財布以外には一円もなかった。あるのは大きな人類の幸福への夢と数十人の人達の善意とであった。

W F C の足あと

W F C は一九六五年に設立されたのであるが、実質的には、十年も前に発足したと言っても差支えないであろう。その頃レイノルズ一家は *Phoenix of Hiroshima* という三十トンのヨットで世界周遊の旅に出たばかりであった。彼等の心の中には、「ヒロシマ」という、まだ察明されていない重苦しい混沌が霞んでいたのであるが、まだそれは明確な形でとらえられていなかったのである。広い海原と、青空と、雲と嵐が、彼等の気のつかないうちに徐々にそれに形を与えていた。そ



松原美代子さん



これはまさにバーバラの「Voyage of Discovery」(発見への航海)であったのである。

一九五八年六月、アメリカによるエニウェトク水爆実験が行われようとしていた時、彼等はホノルルに寄港していた。一足先に実験阻止航海に出た、クエーカーのビゲロー船長の逮捕が、レイノルズ一家の心の中に醸成されていた何かに点火した。或は水爆実験は、彼等の心の中に計算外の連鎖反応を起すヒキガネとなったと考えてもよいかも知れない。

何れにせよ一九五八年七月一日禁止海域での逮捕は彼等を変えた。すなわち、新たな平和戦士が生まれ出したのである。

長い裁判のあと、彼等は広島に帰り、ヒロシマを研究し直し、日本の原水禁運動に参加したり、その指導者たちと激論を交わしたりし、一九六一年にはウラジオ・ストックに向け、ソ連の水爆実験への抗議航海を行った。

そして、一九六二年バーバラは第一回の世界平和巡礼を行う。その時の巡礼者だった二人の若者は現在もWFCの理事として活躍している(松原美代子、英宏君)。

更に一九六四年には、第二回平和巡礼として広島長崎・世界平和研究使節(WP S M)という大使節團(被爆者を中心とし、松本卓夫博士を団長とする四十名)が広島島を出発し、アメリカ、ヨーロッパ、ソ連を七十五日間巡礼して帰国した。

このコロンブスの旅はバーバラを経済的

に破滅せしめた一方、彼女を完全にヒロシマ市民として生まれ代らせたのである。そしてこの巡礼団の描いた種子は世界中で芽を出し、ヒロシマは世界平和への誓と考えられるようになったと言っても過言ではない。

また、それによってワールド・フレンドシップ・センター設立の意識が生まれて来たと理解したい。

即ち、世界平和研究使節がWFC設立の直接の弾き金となったことは疑う余地がないのである。

一九六五―一九六九年(第一期)

この最初の五年間の前半はバーバラが常時館長として活動の大半をとりしきり、私や柳原繁登、山田信蔵、高橋定博等、その他W P S Mの人々がそれを助けた。

また、クエーカーの人々が交替で応援にかけつけた。リン・シバースやサリ・ナップが館長代理をつとめたり、バーバラが帰米した間はニコラ・ガイガーが館長、英人コックス夫人、ハワイからのシャロット・ススマゴがこれを助けた時期もあった。

一九六六―一九六七年の間はベトナム戦争の激化のため、WFCは大変忙しかった。

ジョージ・ウイロビー、アール・レイノルズ、ロバート・イートン、クリス・カウリー以下のクエーカー・アクション・グループがWFCを根拠地として、北ベトナムへの救援航海を準備し、私たちはクエーカーの資金を

第二回平和巡礼団出発



初期の理事全





リン・シバース主任
(観音町のセンター)



リチャード・エルモアと
サリ・ナッブ

基に、一〇〇箇の医療箱を作り、フュニックス号に積載した。

一九六七年には、私を委員長とするベトナム戦傷児救援委員会(V.W.O.C.)が結成され七人の少年少女を広島に招く活動が始まったが、W.F.C.はその中核となり、少女達はパーバラをマミイと呼び、メリー・マクミランを伯母さんと呼んだ。

一九六八年頃リン・シバースが一年間館長をつとめ、非暴力平和運動の種子を広島の地に播いた。

この五年間にW.F.C.を訪れた平和活動家たちの数は非常に多く、ジョン・バエズ(反戦歌手)はW.F.C.訪問後、彼女の講演ギヤラから一、〇〇〇ドルをW.F.C.に寄贈した。これは三つの日本家屋モデルの製作費とパーバラのアメリカ講演旅行の費用にあてられた。

一九六七年八月七日ロスアンゼルスからリチャード・エルモアが広島を訪れ、広島に火を求めた。私たちは慰霊碑の火を石油ランプに移し、平和公園で二二の後、その火を日本製懐爐にうつし、リチャードは真夏の炎熱のもと、背広の内ポケットにそれを大切にたき、ロスアンゼルスに無事護送した。この火は、ベトナムで使われた砲弾の薬莖で作ったトーチに移され、大陸をリレーされて十月二十四日、ワシントンD.C.での、ベトナム反戦秋季大集会のシンボルとなったのである。

この五年間にW.F.C.を訪れた客は三十カ国

延べ一〇〇〇人を超えたのである。

また、クリス・カウリーはW.F.C.を本拠として、イギリス人らしいやり方で特異の平和活動を行った(花の運動)。

一九七〇—一九七四年(第二期)

一九六九年秋、パーバラはアメリカに帰国し、代ってゲルストン、エルシー・マクニール夫妻が着任した。ゲルストンは、半世を世界各地で奉仕員として活動した、厳格なクォーターであり、エルシーはその美声でW.F.C.に歌声を絶やさなかった。

W.F.C.は一九七〇年、本拠を観音町から現在の翠町に移し、新たに会の規約を制定し、理事の定員を二十五名に増やし、五つの小委員会を設けて、組織的な活動を開始したのである。会員数も一五〇名に達し、柳原副理事長の手腕によって、会の財政も安定して来た。

この年七月、第三回平和巡礼が行われた。再び松本卓大博士が団長となり、広島から大原三八雄教授、三戸慎子、上野信子両教授と医学士の羽熊君、長崎から横田カツエ教授の六名、すべて英語に堪能な人々ばかりであり、来町人と直接に交流出来るすぐれた代表團となった。パーバラ及び、その友人たちの世話による旅程に従い、有効な平和使節となったことは勿論である。

更に一九七〇年は渡歴二十五周年に当たったので、私と庄野直英教授が中心となって、「ヒロシマ会議」と名づけた平和学会を、広島



第三回平和巡礼

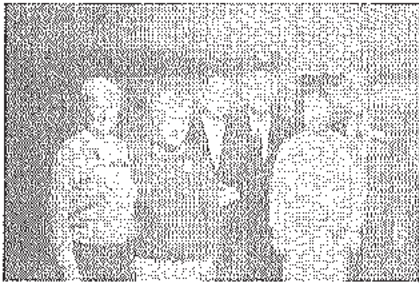


イタリーのダニエロ・ドル
テ訪問

第四回米回チームの
日本巡礼団



インド帰業の父カイトン



地で開催した。莫明からワイリッパ・ノエル
ペーカー卿、ドイツからロベルト・ユンク教
授、イタリーの社会改革家グニード・ドルチ
氏、ハンガリーのテイボル・バルター神父、
アメリカからは原綴を作った学者の一人ユー
ジン・ラビノウイツチ、それにわがパーバ
・レイノルズが招待されて、正式の参加者とな
った。

日本側からは、湯川秀樹、朝永振一郎、飯
島宗一など第一級の学者二十数名が、参加し
た画期的なものとなった。有名な、ヒロシマ
宣言の署名者の一人となったことは、私の大
きな光榮であった。学者のうち教氏はWFC
を訪れたし、アルバート・シュバイツァー博
士はWFC宛にメッセージを寄せたのであ
った。WFCがこの国際的な会議に大きな役割
を果たしたことは歴史に書き留められるべき
であらう。

一九七一年四月、私と妻の二人はヨーロッ
パへの平和行脚に旅立った。ヨーロッパでの
平和活動は消極的であったが、私たちは、前
年のヒロシマ会議の参加者を中心として、ロ
ンドン、ローマ、シシリー、ミラノ、ウイー
ン、パリの各地を訪れ、携えて行ったヒロシ
マのドキュメント映画を紹介し、多岐の平和
活動家との交流を行うことが出来たのは幸い
であった。私も五年間WFCの経験を生かし、
前年のソビエト旅行、更には、一九六七年の
ベトナム旅行などの平和活動に活躍出来るよ
うになった自分自身に驚いている。

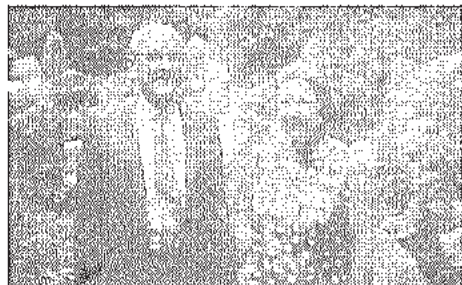
一九七一年八月には、米国西岸地区の平和
団体マンカインド・セントターの幹部、リーラ
ンド・ウィルソン牧師夫妻、ドワイト・ラメ
ンジ夫妻、ウォーカー・ブッシュ氏など九名
の活動家をWFCが招待した。これを第四回
平和巡礼と呼ぼう。彼等は、広島に一週間滞
在し、祈念式典に参列し、次で長崎にも足を
伸ばし、大きな感動を持って帰国したが、や
がてこの人々を中心にしてWFCアメリカ委
員会が設立され、以後のWFC活動に大きな
力が加わったのである。(本部・ロスアンゼ
ルス近郊テ・バーン市)

一九七二年七月には第五回平和巡礼として、
青年平和セミナー(YPS)を行った。今回
は日本全土から公募により、会話能力があり、
平和構築に関心をもち、青年五名が選ばれた。
東京、神奈川、広島、長崎、京都(近隣)、杉
田、三島、三上、神辺)。彼等の旅程、見学
宿泊等にWFCアメリカ委員会が大きな貢献
をしたことは言うまでもない。

一九七二年九月八日マクニール夫妻が帰国
の途についた宇品埠頭では、岸からとフェリ
ーのデッキからとの双方から "Welcome
overcome" の歌声が高らかに海面に
こだました。

マクニール夫妻は一九七七年に再び来広し、
YMCAなどで教鞭をとりながら、二年間W
FCに奉仕された。彼等にとって広島は故郷
以上のものがあつたのであろうし、広島も彼
等を受けて止まないものであろう。両氏こそW

マクニール夫妻(一九七二)

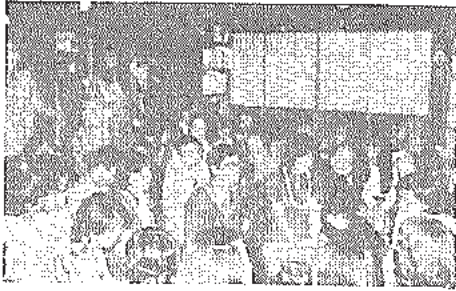


一九七二年ころの理事会





アメリカ人学生五名
巡礼として来る



一九七三年頃のフレンド
シップ・ナイト

FCのモットーである、「友誼の架け橋 構築」の好見本であろう。

マクニール夫妻の後任にはカリフォルニアからエミリー・ライトさんが単身で赴任されたが、健康上の都合で一年で辞任し、あとをニュー・ヨーク州からのスー・ホー・ハン及びグレイスと三人の子供達が引継いだ。スー・ホーは韓国出身のクエーカー米人牧師であった。スー・ホーは韓国語と英語、日本語に堪能であったので、われわれは韓国を語る上に、非常に好都合であったし、東南アジア出身者のWFC認識にも役立った。

一九七四年には第六回平和巡礼(第二回Y P S)が行われ、今度はアメリカの五名(エステラ・モンテス、リンダ・ベルデン、ジョセフ・ヤング、ケネス・キリムニック)が来日し、日本側の青年六名と共に日本を縦断し、八月六日広島、八月九日長崎で締めくくり、多きな成果を挙げた。スー・ホーは、終始このグループ行動をリードしたのであった。

この五年間WFCは、基礎が確立され、国内、国外ともに広く知られるに至った。広島市もその重要性を認識し、年間三十万円ではあるが、補助金を交付するようになった。

一九七四年五月、ハン一家は二年余の奉仕を遂げて帰国し、代ってブレズレンの高名な奉仕者アイラ、メーベル・ムーモール夫妻が着任された。彼はインド農業の父とも言われ四十一年に亘ってインドの熱帯で奉仕を続けられ、ガンジー翁の友人でもあった人で、黙々とし

て、広島若者に多大の影響を与えられたことは特筆を要する。

一九七五—一九八〇年(第三期)

一九七五年という年は、いろいろと記念すべきことの多かった年である。この年の二月私と妻は陸奥直前のサイゴンを訪れた。私としては一九六七年について二度目の訪問であった。前回は私一人であったし、出迎えるものもなかったのに比べ、今回はダオさんや、孤児院長キエンさん、その他孤児たちを含む六十名の賑やかな出迎えを受けた。この八年間に、ヒロシマの数千人の善意が当然の報酬を受けたことを私は感動と共に受け止めた。私たちは、ヒロシマが送った孤児院を見舞い、悲惨な難民の收容所を訪ね、ヒロシマの善意を伝えた。思えば、この八年間にヒロシマがこの新しい悲慘に対して示した善意は、金額だけでも一〇〇〇万を遙かに超えた。他のいかなる町がそれに比肩する奉仕をなしたであろうか。ダオさんは七年間のヒロシマ生活を通じて、日本人のすべてが善人だと信じているように思われた。こういった誤解を真実にすることが重要である。

同年八月一日からオハイオ州、ウィルミントンで開かれた、ヒロシマ・ナガサキ三十年後という平和学会は、バーバラの一年間にわたる準備のもとに開かれた、いわば第二回ヒロシマ会議であった。私たち夫妻と、森下弘、空辰男、山中フミ子の三先生の一同は七月二



第七回平和巡礼(一九七五)

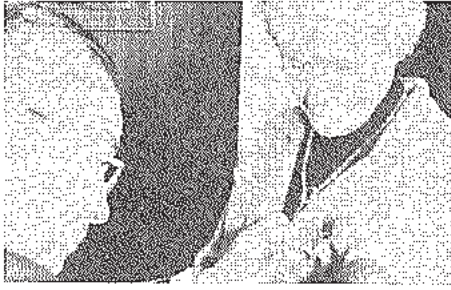


ウィルミントン会議
(一九七五)

ラウ夫人、バーバラさん来広



バーバラ・レイノルズ
名誉市民章授与(一九七五)



十一日サンフランシスコでの世界市民の第一
回大会出席を度切りに二十三日間の旅をした。
それを第七回平和巡礼と呼ぼう。私たちは、
ニューヨークでは国連、チャーチセンター、
サウス本部を訪れ、ワシントンでは、マク
ニール夫妻の歓迎を受け、上下院議員と懇談
(フレージャー、グラヴェル、パーデス)また
多くの平和団体の首脳と交流し、八月一日か
らのワイルドミントン会議に参加した。

この学会に参加し、特別スピーチを行ったこ
とは、私の終世忘れ得ぬ思い出である。会議
は非常に成功であった。私たちは再びニュー
ヨークに引返し、八月五日のヒロシマデー
に参加し、二つの放送局に出演した。(ロバ
ート・リフトン氏の要請による)ロサンゼル
スでは、在米被爆者問題に深く関わり、TV
にも出演した。

この年十月十五日、バーバラは広島に於て、
「名誉市民章」の授与を受けた。外国人とし
ては三人目であった。このことは、WFCも
同じく受賞したことを意味する。

一九七五年十月から八カ月の短期間ではあ
ったが、ワシントンのレオナ・ラウ夫人が館
長に在任した。その間、精力的にヒロシマを
学習し、帰国後も、WFCアメリカ委員会の
機関紙のブレイン発行にたずさわると、
今日に至るまで広島のための活動を続けられ
ていることは感謝にたえない。

一九七六年六月、ラウ夫人に代りメノナイ
ト教団からイヴァ・ハーシュバール夫人が

着任された。八十歳を超える高齢であったが、
強い信仰と、奥深い包容力とで、アメリカ婦
人の優れた一面を示された。多くの若い人々
がその感化を受けた。

一九七六年七月、第八回平和巡礼として、
第三回YPSが、行われた。田島敦子(埼玉)
城川幸一(長崎)、松井恵美、柳沢平、山手
エリ子(何れも広島)の五名が渡米し、五週
間後無事帰国した。今回は何れも平和活動の
経歴者が選ばれただけに、成果も大きかった
ようである。

一九七七年二月イヴァさんが去り、代って
クエーカーのモーリン・パーカー夫人が着任
した。同時に米国の大学で平和科学を専攻し
た、永末榮子が副館長として、モーリンを援
けた。モーリンはWFCの仕事の外、原発反
対の運動に関与し、国内ばかりでなく、ミク
ロネシアにまで足を伸ばし活動された。

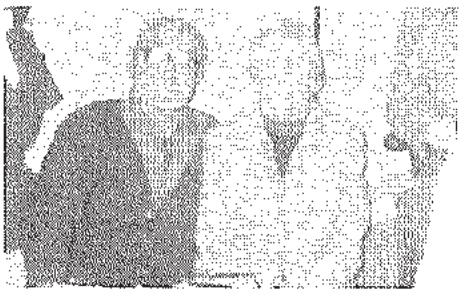
一九七七年には、広島で関連NGOによる
「被爆の実相」についての調査とシンポジウ
ムが開かれ、世界の科学者(日、英、米、ソ、
露、独、アイルランドなど)が参集し、意義
深い報告を関連に対して行った。WFCより
は、バーバラ、マクニール、パーカー、永末
私など多くが参加した。

更にこの年からは、ヒロシマをHAC
(Hiroshima Appeal Committee)の
委託を受けWFC内に翻訳班を作り、ワイル
ドミントンの「ヒロシマ・ナガサキ記念文庫」
への日本文献英訳事業が始まり、田城明夫妻

第八回平和巡礼(一九七六)

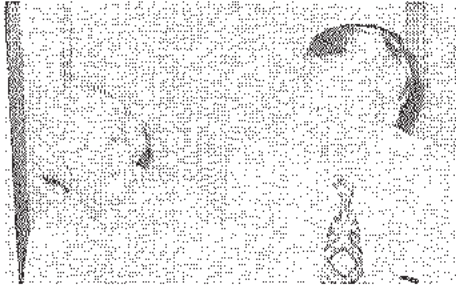


一九七七年の理事会
モーリン・パーカー





一九八一年四月の理事会



メアリー・マクミランと
ウィリアム・ボールドウィン

ラムザイヤー夫妻、などの努力により三十二冊の原爆文庫を英訳送付した。

一九七八年メノナイトから、日本語を話せるスタン・パトラークが派遣され、二年余在任した。

一九七九年七月、第一回TEP教師交換計画 (Teachers Exchange Program) が行われた。第九回平和巡礼である。木戸マサ子、深瀬フミエ、大石武の三教師と、医学士の松原昭吉の四名が渡来した。学期と休暇時期の相違のため、直接授業の参観は少かったが、多数の学校を訪れ、多数の教師と交流し、カリキュラムの交換などを行って多くの成果を挙げて帰国した。またこの年はウィルミントン大学のレディング教授、同じくキャンビー・ジョーンズ教授などがWFCを訪問した。

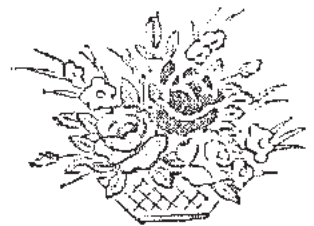
一九八〇年は被爆三十五周年であり、WFCの創立十五周年に当たったので、多忙な一年であった。この年七月一日からアメリカ側からのTEPグループ四名が来日 (第二回TEP、第十回平和巡礼) し、一方七月二十三日から訪日した、WFCアメリカ委員会前役員一行 (リーランド・ウィルソン教師、アイケンベリー夫妻、他八名) 及び、WFCアメリカ委員会新委員長アレン・ディター (マンチエスター大学教授) など十六名が、広島で合流した。八月七日、YMCAでWFC創立十五周年式典を兼ねて、旧友たち約二〇〇名が一同に会し旧交を暖めました。日、米、英委

員会が記念品を交換し、パーバラと原田も記念品を頂いた。私にとっては、何にも増してWFCが十五年も存続し、激えることの出来ない程多くの、そしてユニークな活動が行われたということが驚きであった。そのことは、いかに多くの人々が困境を超えて、世界の恒久平和のために、WFCを一つの場として、追悼し、心を通わしたかと言うことである。

世界平和は到達不可能な遠い空のかなたにあるのかも知れない。しかし、少くともWFCという、世界の一断面に於ては、真正正銘の平和が実存することを私達は知っている。それは十回にわたる平和巡礼を通じて、また二〇〇〇人を超えるWFC訪問者を通じて、確かな手応えとして感じる事が出来るのである。このように数千人のヒロシマびとを端として、平和への連鎖反応が続くかぎり、われわれの前途はまだまだ捨てたものではないことを感じるのである。

終りに

私はWFCの歴史を振り返るに当り、小倉啓西顧問。そして、ホステスとして、外国人の奉仕について叙述が幾分偏り過ぎたかも知れない。しかしこれら数十名の人々の外にそれに数倍は感謝の言葉に窮する程である。最後に、平和といういわば漠然とした理想たることは当然である。特に館長として、進んで下さった、広島市民の皆様、引退された加藤副理事長、亡くなられた、柳原副理事長、山田節男 (市長)、





ワールド・フレンドシップ・センターの 日々を振り返って

バーバラ・レイノルズ

一九六二年

ワールド・フレンドシップ・センター(WFC)での歳月を振り返ると、私は神のお導きに畏敬の念を抱かずにはおれません。確かに私は私の夢であるWFCに設立者として関わってきましたが、WFCの発展と功績に対して、私が賞賛を受ける事は、何もありません。広島を世界に伝える為、そして広島が世界を知る為、広島平和巡礼が世界一週に旅立った一九六二年に二つの事が始まりました。一つは広島市長、広島県知事、個人的なグループ、団体といった様々な人から頂いたメッセージを英宏昌さんと松原英代予さんが広島平和巡礼に携えて行き、彼らの話を聞いた人達に深い感銘を与えました。

もう一つの出来事。フランセス・ロスさんは、次の一年間広島に来て何か出来る事があるかどうかという問い合わせの手紙をくれました。そのとき私は次のより大きな平和使節団の計画に関する世界中からの質問に圧倒されておりましたが、「ここにはその必要性が確かにあります。だからここ

に来て何が出来るかやってみませんか。」と返事を出しました。フランセス・ロスさんはすぐやってきました。そしてフレンドシップ・センターが試験的に設立されました。彼女は日本家を借り、そこはすぐに英会話グループや、アメリカの女性と被爆者の女性が手工芸品と一緒に作ったり、平和問題を語り合う週一度の会合の中心の場となり、そして又、海外からの訪問者を接待する宿泊所にもなりました。そこは、被爆者たちとただ会って話し合うのみでなく、私達が要求に応じられるように、毎日得る新しい知識、洞察を共に分かち合う事も出来る場となりました。

一九六五年八月七日

フランセス・ロスさんは、世界平和研究団(WPSSM)と一緒に旅立つ為一九六四年の春、広島を離れましたが、フレンドシップ・センターは依然として残りました。二十年目の原爆記念日の翌日である一九六五年八月七日に、ワールドフレンドシップ・センターは、原田医師を理事長として名の知られた日本の人々や、重要な後援者たち

やWPSSMの会員全ての人達によって、正式に開設されました。被爆者の人達はSANF核政策委員会からの二十人の旅行グループの会員の為に自宅を開放し、新しく個人的に親密な友情を固めたのでした。

平和へのアプローチ

それ以来、WFCは、たいへん多くの平和へのアプローチを試みてきました。原子爆弾の後遺症に悩む人々の訴えを理解したり、彼らと連絡をとったり、そして常に、個人的に接触をしながら彼らの訴えに答える方法を探してきました。私達の最も初期の試みの一つは、身よりのない多くの老人の為の養護施設の設立でした。それは、年寄いた被爆者を大規模に収容する施設のモデルとして注目されていたにもかかわらず成功しませんでした。WFCと道を隔ててあったもう一軒の家は、私達がこの試みに借りた『友愛荘』でしたが、数日又は数週間といった多くの短期滞在者と、私達と一緒に働いてくれる多くの有志の為の寮に用途変更されました。この家の宿泊料金はつましやかなものでしたが、泊り客の多くは自発的にそれ以上の寄付をしてくださいました。ボランティアとしてやって来たアメリカ人は、彼らの交通費などを節約して部屋代・食事代共で、一ヶ月五十ドルを支払ってくれたので当時のセンター経費のほとんどをそれでもかかっていました。

ボランティア

しかし、時が移るにつれて次第に、ボランティア

アの人々が生活していく為には、給料をもらえらる仕事をしなければならなくなりました。英語を練習し西洋の習慣を学ぶ機会などは、アメリカへ勉強しに行く前に助けと経験を求める学生にとってさえ、もはや魅力的なものではなくなつたのです。日本に住む喜びと本当の日本の生活様式を、経験することは、冬は暖房のない、夏は蒸し暑いといった不便だらけの家ではそんなに人を熱きつけないませんでした。しかしそれでも、まだ驚いたことに、人々は来て滞在しました。そして彼らはそれら全てが、価値あることの様に感じていたようです。

有志の援助

私が一九六五年アメリカに資金集めの旅に立つた時、エドナ・コックスがおりよく現われました。彼女はイギリスで若く年老人の為の家を設立する為働いた事があり、「友愛荘」が居住施設をもった養護施設として試みに運営されている間管理の責任者でした。私が戻った後も、彼女は続けて滞在することに同意してくれました。フィラデルフィアのクエーカー教徒である七十六才のアーマ・ガーラックは、有志の援助が必要だと聞くにアメリカから飛行機で二十時間もかけて、広島にやってきました。それは彼女の最初の海外旅行だったのです。私は必死に彼女を歓迎しようとして、最初の日に本通を案内してしまい、家に戻った彼女は、極度の肉体的疲労をして時差ボケというひどい状態でした。初めがひどかったにもかかわらず、彼女は、二ヶ月滞在し日本と日本人を愛

することを学んだのです。

次々に有志が来始めました。各々の名前をなつかしく思い出すことができます。リン・シパースさん、カール及びガートルード・キース夫妻、ダイアナ・スクラパーノワさん、クリス・カウリーさんといった人達です。そして宮下高子さん、長岡麻理子さん、菅峰子さん、英宏島さん、赤石増美さん、本田初江さん、それに山本初江さんなど、辛抱強い日本人の通訳補助の人達。私達が一時的なものから、永続的なものに希望を与えてくれたのです。一九六八年の春、私が再びアメリカに滞在している間ウォルトンとニコラ・ガイガー夫妻が来て、多くの若い日本人を平和運動にまき込んだサリ・ノップさんに援助されながら館長を勤めました。そして又、アンドレアとパネッサのガイガー姉妹は、WFCの為にたくさん新しい友達を作ってくれました。

WFCのひとりたち

私の旅は、WFCを援助するアメリカ委員会の編成という結果を生みました。再び生活費確保がだんだん困難になっていくアメリカ人のボランティアのため費用を捻出するということも含めて、今やすべてがうまくいくように思えて来ました。しかしながら、WFCのアメリカ委員会の最初の公式要請は私にアメリカに戻って来いということでした。WFCは今や日本人の指導の下で自らの道を決める時が来ていました。しかし現実には、あまりに「バーバラのもの」と彼らは言います。日本人館長を見つけるといふ私の努力は失敗に終わ



バーバラ・レイノルズの送別会(1969)

ったことを認めざるを得ませんでした。そして私が身をひくことによつてのみ、WFCが独り立ち出来るかどうか分かるだろうという事を知りました。私はずり、そしてWFCは飛び立ちました。ポール・閔摩さんが臨時の館長として、理事会の顧問を勤めるため東京から頻りに来て働く事に同意し、原田理事長は、クリス・カウリーさん、小佐々久仁子さん、尾岡厚子さん(すぐにカウリ夫人となりました)によつてうまく運営されているWFCの活動の継続に気を配ってくれました。その夏シャーロット・マズソンさんがハワイから来て、彼女のたいへん独特な活動と技術を加えてくれました。一九七〇年には、ゲルストーン及びエルシー・

マックニール夫妻が二年間たいへん多くの人々から慕われ広島で過ごすことになりました。新しい二人はWFCのために新たな展望をもち、新たな企画を發展させました。

そして私は、永久に広島から離れるのかと思ひ、淋しく暮らしていましたが、一九七〇年のヒロシマ会議の際、シャーロット、ゲルストン、エルシンの後援を受けた変化と進歩を見たり、一九七二年ハン一家の館長時代や、一九七五年にレオナ・ラウさんの館長の時期、一九七七年モリー・パーカーのいた最初のころ、そして一九八〇年スタン・パトラーの在職最後の月と再った様に、幾度も広島に戻ってくる事が出来ました。



小関敦子、クリス・カウリー、バーバラ

世界に広がる友誼の輪

私はただただWFCで行動されて来た事に驚嘆するばかりでした。それはWFCと一緒に数年間ずっとたずさわって来た驚くべき多くの人達、心を融け合った多くの人々、そして世界中に広がる縁物のような友情の組織を育み、広島に寄せられ広島から伝わっていく友情などです。私が名前を上げる事の出来ない人と多くの人がいることでしよう。自分自身はほとんどを奉仕者としてさげながら、間接的にしか知らないエミリー・ライトさん、アイラ及びメーベル・ムーモウ夫妻（一九七五年ウィルミントン大学の会議で最初にお会いしました。）私がついに一九七八年カンザス州で個人的に接触が出来たイバ・ハイシュペーガーさん。そして名前のみ知っている多くの選抜、アシスタントのみなさん全部です。

WFCがやって来た事に對してこれらの人々が個人的にどれほど貢献しているかということに驚く術はありません。数年間を通しての理事會役員の人達、特に原田医師、彼はその場に現れた新しい人の個性を十分に生かすよう努力し、日本式の仕事のしかたに適合する手助けをする様に彼らの良い点を最大限に生かし、不調和を解消するよう努力して下さいました。これら忍耐強いすべての助言者達は一番高い評価を受ける価値のある人達です。とりわけ理事會とアメリカ委員会の間の協力と調和の發展、そして両組織にかかわった兩委員会の役員は、交換プログラム・翻訳の仕事、その独特な機関誌の発行、そしてWFCの

継続的な成功の上で、明確に功績を認められなければなりません。一九八〇年八月七日たいへん感動的な出来事がありました。それは十年間たいへん誠実に働いたリーランド・ウィルソンさんから、アラン・デイトターさんにアメリカ委員会の委員長の座を受け渡された時です。

私にとって広島でその席に出席出来たということとは素晴らしい経験でした。そしてWFCが存続している、又本場に多くの人が継続のために働こうと思っていることを実感しました。

そして、いま

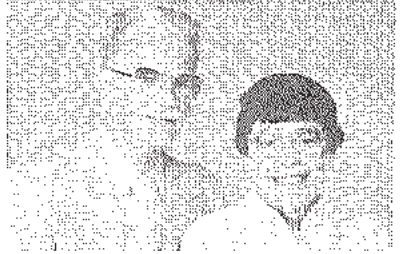
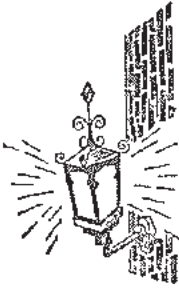
しかし、これから先、いかに進めていくかということは、我々全てが考えなければならぬ問題です。初めに申しあげた様に、時代は変わりました。彼選者はだんだん年老いていきます。たいへん多くの設立当時の委員の人達が、十五周年記念の集会さえ知りませんでした。他の人達は、健康状態が良くなかった為、参加することが出来ませんでした。参加した多くの人は若く、平和問題と国際交流に興味はあるが年老いた被爆者への関心に欠け、彼らの個人的要求を理解していませんでした。

私にとって昨年広島に滞在した時の最も意味深い集会は、私が広島を離れる直前に開かれたフレンドシップ・ナイトです。その時、私は多くのなつかしい友人達と連絡がとれたのです。私達は真摯な自己反省と、一体WFCとは何であるのかという再検討をし、共に思い出にひたり、素晴らしい夜をすごしました。初期の意志は以下の四つの点

に要約することが出来ると思っております。一、被爆者の話を聞き、彼らを大事にすること。二、被爆者の要請を知ること。三、それを世界に知らせること。四、援助すること。

私が話に聞いた、WFCと合同で年老いた被爆者の為に老人ホームや看護施設の建設をという計画は、素晴らしい考えだと思えます。アメリカの有志に、特別な機点もなく自分の費用で日本に行つて困難な条件下で生活し、言葉、買物、食事の用意でわずらわされることを願ひのは正しいとは思えません。

若い有志なら出来るかもしれませんが！しかし両国で年を取っている人々がお互いを知り勇気づけるのも彼らにとっては重要で、メアリー及びクレアランス・ポーマン夫妻は、与えるべき多くのものを持っており、WFCの者からの被爆者会員の人々と知り合いになるにつれて、彼らは又多くの事を学ぶでしょう。しかしポーマン夫妻の様に、海外奉仕の一年間安心して暮らせる場所があるというのとは何と羨望な事でしょう。たぶんさらにもう十五年のうちには、私にだってその順番がまわってくるかも知れないのです！。



愛は憎しみよりも強し

現館長
クレアランス&メアリー・ポーマン

の出来事でしたので原爆犠牲者が味わった拷問にも似た悲惨な生活の苦痛がどれほどのものかどうしても語り知ることはできませんでした。核兵器の増大、恐しい核戦争勃発の可能性があることも知っています。一度全面核戦争が起れば、理論的には人類が完全破壊されることも知っています。しかし単にこれらの事を知っているだけでは十分とは言えません。

「ワールド・フレンドシップ・センター」は一九八〇年六月二十七日までは、私達夫婦にとつてはただの名前にすぎませんでした。この日、WFC米国委員会委員長であったリーランド・ウィルソン氏から一年間広島WFCの館長として赴任してはとの半し入れがあったのです。その後は興奮に満ちた日々を送りました。二人とも歴史的平和教会の一員であり、若い頃から平和を強く望んでおります。平和の若イエスに従う者として私達は平和の福音を宣べ伝えるためにずっと、戦争中も生涯を捧げて参りました。しかし私達は一つの原爆投下で生じた完全破壊と信じ難い苦しみから遠く離れておりました。勿論原爆爆発実験が初めて行なわれ人類史を大きく変える危機となった事実を知っていました。また原爆が広島・長崎両市に投下され多くの人命が奪われた事も知っていました。同胞に向けられた残虐行為を私達は深く慨嘆しました。ところが実際の悲劇はもっと遠くの国

広島WFCへ来る決心をして早や九月月になろうとしています。米国の準備に三ヶ月、センターに来て約六ヶ月が過ぎました。当センター及び当市で私達は心からの歓迎を受けています。二人とも日本の美と文化の御賞者でしたので多くの素晴らしい日本の方々と深い友情の絆を結ぶことができました。この暖い友情のおかげで寒い冬、古い日本家庭で生活する不便が随分解消されました。異国に住む外国人ではなく、自国にいるように感じる場合もあります。当地での私達の経験がWFCという名を生きたものにしてくれました。センター十五年の歴史とその活動を讀んだだけでセンター創設者と指導者の見識の高さと献身の程が何え感動を覚えます。被爆者に奉仕し、円陰間に友情の架け橋を築いてきた記録は勇気を奮いたたせてくれます。しかし実際に仕事に従事し、人類史上最も破壊的な戦争行為が行なわれた地を歩き、被爆者の方々と直接お話しをして、改めて戦争のすさまじい悲劇に気づかされます。広島へ着いて二日目有名な外科医でWFC理事長の原田東樹博士が初めて平和公園と市内を案内して下さいました。その日から私達はセンターの仕事に没頭しており

ます。

平和を築けよ

仕事は種々雑多です。世界各州からの泊り客のお世話、英語クラス、文献を英・日両語で要約するための優秀な翻訳者探し、毎週の原爆病院訪問原爆看護ホーム訪問、大学生の討論会参加、月一回のセンターでのフレンドシップ・ナイト参加、日本人スタッフと共にこなす家事、書簡の交換、や他の多くの事を通して、私達は平和をまのあたりに見る機会を得ます。平和公園へ何度も足を運び人命の無差別大量殺戮を思い出させる碑を訪ずれば、平和文化センターで原爆犠牲者の耐え難い苦しみの横を犠牲者が生々しく描いた絵に接し、爆弾投下に関する映画を見、爆発の恐ろしい破壊力を示す資料が展示されている原爆資料館を見学し忘れる事のできない体験をしております。このような経験を通して「平和を築けよ」の天からの新たな命」を受ける思いがします。

当センター創立十五周年を祝うに当り、WFCが原水爆犠牲者に奉仕し、世界平和実現のため今日まで果してきた意欲深い役割を満足感と誇りをもって思い起こすことができます。また記念日は未来を見つめ新たな計画をたてる時でもあります。WFCが平和を築くための実行力ある機関として歩むのであれば今日地球上で人類が生存できるかどうかの基本問題を真剣に考える必要があります。急を要するのは核兵器廃絶のためたゆまず努力することです。現在、地球上の全人類を今すぐ、繰

返し何度でも殺せる程の爆弾があります。TNT火薬に換算して人間一人に対して十五トンもの爆弾があるのです。にもかかわらず更に強力な爆弾が作られています。この悪行を止めさせるため是非でも手を打たなければなりません。一九九九年までには、おそらく一大都市を破壊できる兵器が力のある人なら誰でも背中にかつづけるほど研究が進むと言われているのです。

共に生への道を

しかし核兵器廃絶運動だけでは十分ではありません。戦争そのものが人類の真の敵ではないでしょうか。国際間の紛争解決の正当な手段として戦争を認める限り、使用兵器を類別し制限することは、不可能でないにしても困難となるでしょう。戦いが激しくなれば、人間も国家も勝つためには見境がなくなるからです。核兵器での人殺しが悪であるのに他の兵器での人殺しが善であり容認できる理由がどこにあるでしょうか。今こそ真の敵と闘う行動を起しましょう。先ず第一に、人命の尊厳と神聖を認めることが不可欠です。人命が何よりも最優先されるべきです。人類の幸福に寄与しないものは何ら価値がありません。人は組織のため、勿論国家のために存在しているのではありません。組織は人類共通の福祉に役立つときのみ真価が認められます。戦争は人殺しです。文明社会にあってはならないものです。戦争は命と命を支え豊かにする資源を途方もなく浪費します。戦争でエネルギーと資源を浪費すれば後続の世代は代々に渡って貧しくなります。戦争回避のため、

その真の原因をきわめ、それを除去せねばなりません。他者を犠牲にしてでもこの世の資源を手中におさめたがる人間・国家の貪欲が主要原因の一つです。全世界で軍事費に三五〇〇億ドルも当てる反面、飢えに苦しむ人に十分食糧が与えられず、文質を克服できないのは、私達の価値体系がどこか狂っているのです。第四世界のいたる所で年間国民所得が僅か一人二〇〇ドルしかなく、現に餓死している人もいます。不公平が著しいこの世界では思い切った発想の転換が今や遅しと迫られています。戦争に浪費される費用のうち少しでも恵まれぬ人々の農工業技術修得に当てられれば紛争の源を解決するのに大いに役立つことでしょう。

センターでの私達の仕事は「毎日の仕事」以上のものを要求します。国際情勢を鑑みてこの十五周年記念はWFCがその目的と仕事を再考する良い機会かも知れません。組織の基盤をしっかりとものにすること、計画立案にもっと広く企画者を求めること、長期間任につける強力な指導者集団をつくるため十分検討すること、経済面の安定した支援を得ること、大きな仕事に取り組む私達の努力を新たに意気づけしてくれる人間の資質を育てた知恵と力を認識すること、終りに、同じ信念と目的をもった他団体とのより密接な協力関係をうちたてること等が考えられます。

愛は憎しみより強いことを信じて、目前に描かれる生と死から、共に生への道を選ぼうではありませんか。

小さな友情の 架け橋

現W.F.Cアメリカ委員会委員長

アレン・C・テイター



厳肅な事実

二月十五日、日曜日の朝、私は海外ブレズレン大学の学生グループとともに、東ドイツのウエルドールにいま

した。メソジスト教会がその日私達の世話をしてくれました。教会の朝の礼拝に集った人達への挨拶の中で、私は、最初の原爆投下から三十五年目の一九八〇年夏の広島、長崎での平和祈念式典の経験について語りました。一九四五年に広島、長崎に原爆を投下したことに對するアメリカ人への恨みや敵意はほとんどないことに驚かされたことを述べました。むしろ、深い関心は、このような核戦争が二度と起こらぬ事、このような兵器がいかんにも恐ろしいものであるかを世界中の人々が知ることにのみあると感じたのでした。礼拝の申での牧師の話は、一九四五年、二千機の英米爆撃機によるドレスデン近隣の空襲により、ほぼ同数の人々が殺され、負傷し、この美しい古い文化の中心

地も完全に破壊しつくされたことを思い出させました。次の週ずっと何度も空襲によりアメリカが東ドイツを破壊したと聞かされました。

しかしながら、悲劇的に違ふ点は、東ドイツでは、これらの恐ろしい思い出は、反西歐、反資本主義者の宣伝の一部として利用されていることでした。ドイツでは、現在のソ連による防衛を述べ、また、ソ連人がヒットラー資本主義者の抑圧や、現在の西歐資本主義者の抑圧から東ドイツを救ってきたことを述べる為に、敵意と対抗の炎が利用されてきたことは明らかでした。私は、西歐軍国主義も西歐の資本主義者の経済的世界支配もいずれも擁護する気持ちには毛頭ありませんが、戦争でうけた傷は、何者かの政治的意図がこの傷口を更に広げようとした場合には、決していやされることなく血を流し続けることがわかります。冷戦の恐れと対立は、平和と調停が起こり得る状況を作り出す努力をすること以上に大変なことだったのです。

これらの事を考えてみますと、第二次世界大戦やベトナム戦争の間に、私達の新聞に報道された残虐行為の記事が思い出されます。もちろん、残虐行為を行なうのはそれまでは常に「敵」の方でしたが、ありがたいことに遂に、勇敢な記者により、ベトナムの疑いのある者として送られておくと、サイゴンの「トラのおり」(“Tiger Cage”)や、ミライ村で罪のない一般民間人がアメリカ人に射殺された事などが報道されました。残虐行為や民間者殺害のことが人々の耳目にふれるように努めることは、広島と長崎の平和祈念式典がそ

うであるように、これ以上あのような悲劇が起こらないよう反対することに、人々が個人的にたずさされる助けとなります。また、「敵」を憎み、「敵」から遠ざかるという私達自身の態度を正当化することにもなります。

恐ろしい提案

これらの事を考えてみると、私には、米国のレーガン政権がソ連とワルシャワ条約機構に比べて米國とナトーが軍備関係で劣勢であるかのよう

に強調していることが強く思ひ起こされます。このような展開は私達の時代を恐ろしい時代とします。より恐ろしい兵器が新たに生み出されることにより、軍備競争がエスカレートするという新しい危険があります。現在、私がこの原爆を書いている一九八一年二月の時点でも、私達の新しい米國政府は、中性子爆弾の開発を押し進めています。この爆弾は、非常に強力な一時的放射線を発し、従来の核兵器のような破壊的爆発や強い発熱なしに、限られた範囲で全ての生命を奪いとるものです。ですから、建物や兵器に重大な損害を与えずに人間を殺せます。レーガン政府はまた、クリンチ河堤壩型原子炉エネルギープロジェクト (The Clinch River Nuclear Breeder Reactor Energy Project) の復活と新しい長距離爆撃機の開発を提案しました。これらの提案は、いくつかの点で恐るべきものです。まず第一に、これは私達が、広島、長崎、ドレスデンから何も教訓を学びとっていないことを示しています。ある軍事ないし政治的状況下で

は、核あるいは他の集団威殺兵器の使用も正当化されると感じているようです。第二に、圧倒的な数の軍隊や戦車が地上から進攻してこようとして、領土を侵されることもなく、長期間にわたって土地を汚染する危険もおかずに、進攻を防げる一つの方法として中性子爆弾が紹介されていることです。このように、中性子爆弾は、防衛の為の兵器と見られています。ナトー諸国に配備する予定で現在計画されている、新しいシリーズのロケットは、中性子爆弾を装備する可能性があると思われています。こうして、危険と考えられる国々を戦術兵器で封じ込めることが、世界的規模で実際に拡がるだろうと考えられます。

第三に、これらの兵器にかかる初期費用だけを考えてみても、その為に米国予算の人間へのサーピスに閉する部分が削減され、第三世界への援助を減らしてドル不足を抑えることが考えられます。いかなる経済といえども、このように兵器の開発をくり返すのであれば、自国民の健康と福祉の必要性を無視し、その経済に相互依存している国々を無視せぬことには生き残れません。

第四に、増殖型原子炉開発中止の決議（これは、プルトニウムが兵器に悪用されること、それがテロリストや爆弾製造者に利用されることをなくしようとした、カーター前大統領の努力の一部分でした）の撤回は、米国の核非拡散政策（この政策は、プルトニウムの生産と、増殖炉技術を制限することにより、新たな国々が核兵器の開発を行なうことを妨ぐ目的のものでした）の終りを告げる信号かもしれません。

最後に、新しい爆撃機を作るプロジェクトは、より一層高度な兵器を求める競争を際限なく続ける長期的意図を示しており、（なぜなら、新しい爆撃機の出現は製造開始から十年を要するのですから）、軍備制限あるいは軍備縮少の為のSALTの経過を、ほとんど、あるいは全く信じていないことを意味しています。

いまは恐れや失望の時でなく

最近の政治的緊張は、レーガン政権がカーター政権の主要政策を取り消したことに原因があるのみではなく、アフガニスタンや人質、内戦、テロリズム等の問題、更に一見終焉したかに見えるデタントにも起因しています。にもかかわらず、私達が共に分かちあわねばならない未来に対する避けない破壊行為、あるいは恐れに私達が降参してしまふ時では決してありません。

東ドイツの一般人との数多くの話し合いを、共産党員や青少年団体の役員との話し合いの後で、東側の人々も私と同じように新しい情勢に恐れを抱いていることがはっきりとわかりました。彼らも戦争や対立的政策を好みませんし、自分達が生活水準や住宅政策の面で築きつつある大きな財産を失いたくないと思っています。（私が前回訪れた一九六六年の時と一九八一年の東ドイツの経済的差異の大きさには驚かされました。）

世界中が、伝染病のとりこにされているようです。このウィルスは、偏執病（パラノイア）と病的興奮（ヒステリー）を生じさせ、国家主義を復活させ、軍備競争と新兵器による過去の大破局を

忘れさせ、新しい兵器を生み出すようです。

ナショナルリズムの絶い合い、イデオロギーの絶隔、私達の価値と社会が生き残れるだろうかという恐れといった複雑な問題には、簡単な解決策はありません。しかしながら、私達は、私達の時代を失望の時ではなく、仕事の為の時にしなければなりません。恐れと憎しみと病的興奮に代わる、具体的運動が必要ですから、WFCのような友好と理解の小さな橋は、その大きなや知名度に全く関係なく、意義深いものだと思えるのです。

平和へのステップ

WFCの将来の貢献について、私のいくつかの夢をあげていいでしょうか。アメリカ人、日本人、ヨーロッパ人（東ヨーロッパも含めて）、東アジア人、台湾人、東南アジアやインドの人達が一堂に会して、平和は世界を創る上で、私達がかかえている関心事について、また新しい世界に向けて私達がとれるステップについて共に考えるワークショップや平和セミナーを、第三世界で開催することへの援助が行えないだろうか？。夏のWFC交換プログラムがより多くのエネルギーを支援と開発動員できるように利用する方法がないだろうか？。長期的に平和研究を行なっている教授団や学生を大学間で交換を計画する手助けができないだろうか？。そうすれば、広島、長崎の今の状況が具体化し、軍備縮少と世界紛争への平和的解決についての関心にエネルギーを与えることになるでしょう。

他の国々から支援グループを組織することを手助けし、核競争の危険に対する彼らのエネルギーと関心の道を開くことに手をかせないだろうか？あるいは、核への意識とともに、一層の平和と正義を促進する為に、既存のグループとネットワークを作る手伝いが必要だろうか？日本フェロニッシュ・オブ・リコンシリエーション（会員二五〇名）や国際FOR（会員四千名、私は四年毎に開かれる国際FOR会議のUFOR代表でした。）が、これまで述べた提案のいくつかで、WFCと協力しあえないものだろうか。皆様方のお考えはいかがですか？この機関誌を通して皆さんの考えをお互いに分かちあいましょ。

今こそ、私達の共通の課題にむけて、心と手を使う時です。お互いを刺激しあって私達の平和な世界実現のビジョンを分かち合い、現在の戦争の病的興奮、恐れ、相互不信の洪水の中を、友好の小さな橋のおかげで、人間性が安心して歩んでいける道分かちあわねばならないと思います。友好と平和の橋づくりに、皆が再び身をささげようではありませんか。友愛こそ、くずれ落ちんとしている世界を固める、強い社会的セメントなのです。



日本の皆さんへ

前WFCアメリカ委員会委員長

リーランド・ウィルソン



WFC十五周年記念おめでとうございます。昨年八月、米委員会の代表團と教師交換計画で日本に来た四人の先生方と共に十五周年記念を祝うことができ大変

光栄に思います。WFCは、過去十五年間、友情と国際平和実現のため努力してこられました。これは非常に意義深い事です。WFCは核戦争による破壊を最も急務的に示している都市にあります。WFCは、バーバラ・レイノルズ女史と賛同者の理想を実現させるために活動を続けています。セクターは平和を一日でも早く実現させようとする広島の人々の献身的努力によって支えられてきました。私が米委員会委員長として務めてきた過去十年間を振り返ってみるといろいろな事が思いかびます。

一九七一年に広島・長崎への平和使節団を率い

てセクターの人々と直接交流をもち理解を深めたこと。

— エミリー・ライト女史、グレース・スー・ホー・ハン夫妻、アイラ・メイブル・ムーモ夫妻、レオナ・ラウ・エラー女史、イヴ・ハインシュパーガー女史、モーリン・パーカー女史、スタン・パトラ氏、メアリー・クレアランス・ポーマン夫妻を館長として派遣したこと。

— 原爆投下二十五周年記念の年に日本から代表団の招聘、日米両国での青年平和セミナー開催、両団の教師交換などの行事を計画、実行したこと。

— WFCに経済的援助の道を開いたこと。

— WFC機関誌「友愛」を定期的に発行し、米審議会会員六〇〇名に米委員会発行の機関紙と共に送付したこと。

— 教会特に歴史的平和教会と共に継続的援助を求めたこと。

— 理事を含めた日本の人々を招き平和実現の共通の目的を話し合ったこと。

— 在米被爆者の医療援助の法制化運動に協力したこと。

— 核戦争の意味を理解してもらうために国中の教会学校、種々の団体へ講師を送り、視聴覚教材を提供してきたこと。

WFCとの関りにおいて、私にとって最も意義深かったことは多くの友人を得たことです。日本の家庭に滞在する機会も得ました。

日本の人々は、好意的で寛大です。その情深さと寛大さは世界でも比類がないものだと思います。十五周年記念は、過去の歩みを振り返るだけでなく

WFC館長としての 追憶と希望



普連土学園長

関屋正彦

く、将来をも考える区切りの時と云えます。将来、WFCが世界平和にむけて運動する非常に強力な組織になるでしょう。今日ほど世界が核戦争による破壊の危険にさらされている時はありません。ですから、世界平和を求めるはつきりした声があるほど必要な時もないのです。

将来に向けてあなた方とともに協力しともに働きたいと思えます。

私がWFCの館長として勤めたのは十三年前であり、それも常時居るのではなく、東京から毎月一週間位通勤ということ

ラさんと小佐々久仁子さんが住み、他のひとつの方に英人のタリス・カウレーと私が住み、また客室に使用していた。パーバラさん、久仁子さん、タリス君と私の四人が常勤の職員であったが、しょっちゅう出入りしていた人にも水原雪吾さんがいて、また英文で Hiroshima in memoriam を編集刊行し、今、東広島で高等学校の教師をしている高山等さんがいた。ドイツ人のニコラ・ガイガーさんも時々泊っていた。最近なくなられたときくハワイから見えた舞姫さんも住人でおられ、ハワイ近海でとれた美しい珊瑚を見せてくれた。パーバラさん、久仁子さん、カウレー君と私の四人がしほしば集ってWFCの仕事について相談した。また時々原田先生を理事長とする理事会が持たれた。その後亡くなられた柳原繁登さんや、最近永眠された市役所の渉外部長であった小倉野さんも理事であった。

WFCの使命は、「ノーマア・ヒロシマ、ノーマア・ウチア」であり、原爆が落とされた広島を世界に紹介して、原水爆のない、また戦争のない平和な世界の建設に貢献することである。また、WFCのつとめのひとつは、外国の訪問者をとめることであった。その中の一人にインドから見えた英人のドロシー・ルールという婦人がいた。職員のカウレー君は英国の「Page News」の特派員でもあって、平和に關する情報を熱心に集めていた。彼のおかあさんも来広して滞在され、マーマレードを作っていた。そしてそれをセンターの製品として販売した。カウレー君はセンターで勤っていた日本の女性あつさんと結婚

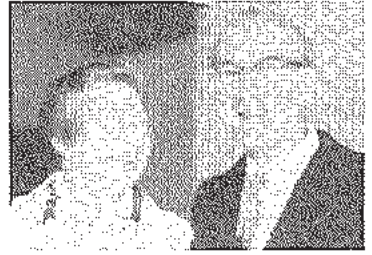
し、英国に帰ってのち永眠したが、夫人とお子さんは英国に留っていると聞いている。

私は仙台に行くためWFCを去り、その後三年間を英国で過ごしてのち、帰国後七年寂りで広島を訪れ、新しい地に移転した現在のWFCにとめてもらった。原田先生が今なお理事長として活躍されておられ、また朋友であり同僚でもあった舞姫さんたちにも会えたことも大きな喜びであった。また数年間館長を勤めたマクニールさんと夫人（在英中初めて会った）が再び来広している間に再度センターを訪ねることができ、彼等夫妻の家に三日とめてもらい、谷本牧師、湯浅之次氏その他の旧知にも会うことができた。

平和のメッカ広島について、英詩人エドモンド・ブランデンが作ったすばらしい詩（友愛四十三号・一九七九年・冬）を引用させていただきたい。ヒロシマよりも誇らしき名を持つ
まちは世にあらず

君は平和の鳩のやど あちこち人は
ここに来て かがやく姿見るらんか

広島の被爆者は私たち日本人のみならず、人類の身代りとして生命を奪われ、また今なお後遺症に苦しんでいるのである。彼等は私たちのため十字架に付けられて殺されたイエス・キリストの犠牲の死と苦しみの象徴である。だから私たちは彼等の死を空しくしてはならない。WFCの使命は、この残酷な事実と私たちの願望を世界に訴えることではないか。核兵器が廃棄され、戦争が絶滅するときまで、これこそは被爆者に対する最大の慰霊となるものと思う。



私達の人生の ハイライト

エルシーとゲルストン
・マクニール

日本人館長の実現を

私達は、ワールド・フレンドシップ・センターの十五周年記念に参加できなかったことを残念に思います。センターと私達が共に二十周年まで生きながらえますように。これからの困難な日々センターを存在させるためには、広範囲の援助が必要とされるでしょう。私達ができるだけ寛大な援助をする一方、主な援助は日本人から与えられなければならないでしょう。外圍の友からの贈り物と共に（アメリカ合州国の基金は、本國では國の方針や政策をもっと理性的にするために、また海外では貧しい國々のはく奪され力のない人々を援助するために必要とされています。）またセンターのスタッフのある程度の継続性と交代期における重複期間が私達のみるところが必要です。そうすれば方針が一定し記録は現在まで維持され、古い会友は忘れられず、価値のあるプログラムも実施可能で、役立てば続けられ、新しい活動は必要なき始められるでしょう。平和団体間の協力

——可能なある程度の統合——がもっと必要とされています。これらすべてのことは、もしセンターが国際的ボランティアのなかで、永続的な住み込みの日本人館長をもつことができれば大いに助けられます。

私達は一九七〇年から七二年にかけてスタッフとして働いた期間を、私達の人生のハイライトとして大いなる喜びをもって振り返ります。私達が受けた暖かい歓迎、原田理事長や理事の徳力と助言、プログラムへの新旧の参加者、そして社会に於いて広島と世界の国際理解と平和を築くために結ばれたすべてのもの、宗教的及び他の市民行事への参加と共に、YMCAと他の英語学校に於ける週二日の教えるの機会、何人かの人々にセンターへの興味をひきおこせることや、平和実現が可能な世界をめざして生きること、役立ちました。もし住みよい世界が存在するはずなら、また、もし人間が神のすばらしい世界とすべての生命を破壊しないはずなら、この目的を達成することは重要です。それ故にフレンドシップ・センターと他のすべての平和団体が、人々が尊敬と平等、相互扶助と他への思いやり、人間性や神の与えたもうた人生の源の重要性に無関係に勝つためのそう毒を流しよるよりも、永遠の価値に主眼点をおいた安全で幸せな生活ができるように、人類が直面している困難な問題を解決する方法をさがす、その時点で効力を増し存続することが重要です。

愛と感謝の証

私達がWFCにおける生活を振り返るとき、あ

る特定の活動と目標が重要な業績として目だっています。その一つとして毎週病院や老人ホームに被褥者を訪ね、この勇氣ある人々に愛のこもった友情・本・買物のサービスを提供することでした。この活動の重要な段階は、前任者であり我々の任期の最初の一年間を留したシャーロット煤孫によって継続されました。彼女は思サンゴから宝石をつくる方法を教えていました。エルシーが五年後に老人ホームを再訪したとき示された愛情のこもったもてなしは、愛と感謝のまざりもない証でした。

ワールド・フレンドシップ・ナイト（国際友情の夕べ）は、一九七〇年に大きな楽しいクリスマスパーティーにまで発展しました。毎月、服装、ダンス、歌、習慣、食物等を通してお互いの生活様式を尊重できるように国際文化的なプログラムを主催しました。プログラムはスタッフによる委員会と参加者により企画されました。せんべい、クッキー、お茶、果物、ジュースの軽い茶菓が出されました。出席者はすべての年代にわたる三〇人から九〇人以上におよび、在広外人や宿泊者も多数参加しました。

WFCの機関紙「友愛」は度々期間をおいて定期的に発行され、将来の計画、過去のスタッフやセンターの会友に関する個人的お知らせ、最近のできごとの報告、そして危急な問題に関する時おりの簡単な記事を載せました。

松本車夫博士の提案により、私達は週毎に会合をもって読んで討論したり、英語で歌ったり、時には劇を演じる若い人々のグループをつくりまし

た。私達はこのグループを何か特別なものと思えていました。

良き思い出と共に

おそらく最もすばらしい活動が、私達が出発の準備をしていたときに起こりました。広範囲の地域から四〇数名の人々——十六才から六十才にわたる外人、日本人、男、女、学生、労働者——が非暴力社会変革の四日間セミナーに集合しました。この活動の成功は岩谷久仁子、東京クエーカーミートニングの協力、そして米国フィラデルフィアにあるジョージ・ウィロビーのニューライフェンターから派遣された二人の訓練された指導員の功績によっていました。このグループは後年何度かフォローアップの会合を開きました。

一九七〇年から七二年にかけてのセンターの他の活動としては、以下のものがあります。若い成人のグループがWFCやその他のお客様に、意味のある広島見学の案内ができるようになるまで英語に力をかけるために、週に一度学習会をもつこと。新しいアメリカ委員会がWFCとの共同プロジェクトとして、一九七一年八月六日から九日にかけて訪れたこと。ちょうどこのときセンターは現在の所に、ボランティア、会友、スタッフの協力により、費用をかけないで引越をしていました。一九七二年に五人の日本の若者をアメリカの若者と合同で一カ月間の研修旅行に派遣したと。

良き思い出、愛と平和がすべての私達の友と共にありますように。

ワールド・フレンズシップ・センターにおける私達の活動

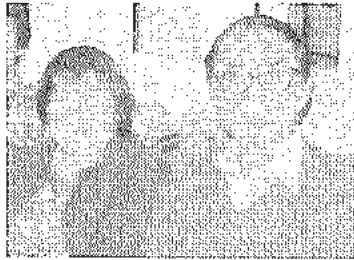
(一九七二年十月—一九七四年九月)

グレース・ホー・ハン スー・ホー・ハン

さまざまの奉仕活動

グレースは、イタキ大学でのフレンズ派親会に出席した一九七二年七月にワールド・フレンズシップ・センター(WFC)のことを知りました。

バーバラ・レイノルズが映画「広島」を紹介し、WFCで活動する人を求めていることを話しました。一九七二年ニューヨーク年會会期中、WFC支援と広島関係問題が議題にな



りました。そして私達は広島での奉仕活動のため十月三十一日米広

しました。エミリー・ライトが当時の館長でした。私達の活動は、各国からの広島への観光客を一晩接待し、彼らが広島への訴えを理解する手助けをし、彼らの体験とか知識を日本人学生に語ってもらう国際フェローシップ・ナイトを開催することでした。YUIは年四回発行されました。私達が広島に滞在した二年間に、英語、日本語、韓国語、ベトナム語の四カ国語のクラスがありました。毎週、スタッフは被爆者にささやかな奉仕をするために原爆病院と養護施設を訪問しました。子供達の合唱グループは異なる言語で平和と協力の歌を学びました。私達の三人の子供、十才のジョセフ、九才のピーター、四才のレベッカは私達と一緒に多くのプログラムに参加しました。

さらに、私達はWFCの活動をもっと多くの人々に広めるよう努力しました。他の平和グループ地域共同組織、学生グループとの接触は重要でした。私達は関連の日、世界市民集会チャリティ・コンサート等の援助を行いました。総勢六二名からなる一〇組のボランティア・グループは、外部の人とほとんど接触することのない成人の癌性脳腫瘍患者と身体障害者の施設を訪問しました。WFCは軍国主義と暴力に替わるものを求める学生達のために非暴力研究会を幾度か催しました。阿野陽子が日本人スタッフでした。

韓国人被爆者・ベトナムの子

WFCは、韓国に住む韓国被爆者に対する養護を表明しました。数名の被爆者が招待され、写真と体験談とで彼らの実情を知らせました。韓国に

は、長年被爆者のための特別医療施設はなく、また原爆に関連した特殊な病気を治療する訓練を受けた医師もいませんでした。平和な公園には、原爆で亡くなった韓国人にささげられた記念碑がありません。

私達家族が今春韓国を訪問した際、スー・ホーはタエグ近くのハプチュアン市に住む韓国人被爆者を訪問しました。過去数年間にわたり、日本の関係医師陣は調査を行い、治療を行うため韓国を訪問しました。日本政府は、被爆者援護法を通じて日本に住む原爆被爆者を援助し、定期的医療検診と、必要とあれば病院や養護施設での看護を行っています。韓国ではそのような法律はないので、被爆者に対する援助はすべて関係個人またはグループが行っています。一九七三年に三人の韓国人被爆者が病院で治療をうけるため広島へ招かれました。このようなことが行われたのははじめてのことでした。私達が韓国人被爆者に対する憂慮をニューヨークフレンド派の人達に表明したところ、カナダのフレンド派の人達が運賃援助に応じてくれました。原爆被爆者の治療を目的として日本と韓国の関係者によって建設された韓国ハプチュン市の小さな診療所が二つあると先に韓国を勉強するためのクラスが二つあると先に述べましたが、これは日本の大学生達が韓国の言語に関心を示したときに開かれました。この夏、二人の日本の若者が韓国を訪問し、多くの友人を作ってきました。

私達は、その頃厚田病院に住んで、戦争による怪我の手当とりハビリ治療をうけていた四人のベ

トナムの若者を知りました。マイ・フォング・ダオ、グウェン・ベン・ヒュー、ポー・ディン・クイ、グウェン・テー・フィエトの四名です。彼らの勇気と気遣いには感激しました。彼らは多くの集会でベトナムの平和の歌を歌ってくれました。

独自の平和の訴え

当時の主な活動は、一九七四年夏の「第二回若者のための平和セミナー」でした。六人のアメリカ人と九人の日本人の若者が六週間、旅行をしたり、日本の文化、教育、日本における少数民族、宗教、現代の社会問題について共に学んで過ごしました。友情と理解による世界平和が大いに強調されました。私達は全員、八月六日広島で、八月九日長崎で、平和式典に参列しました。「若者のための平和セミナー」によって、平和に対する私達の責任感はずっと深まり、私達そして他人に対する理解が増しました。

世界各地からクエーカー教徒をWFCと広島へ迎えたことが特にうれしいことでした。パーバラ・レイノルズとガートルド・キイスは、一九七三年十月に来広し、オハイオ州ウィルミントン大学で、原爆と生存者の苦しみに関する英語で書かれた文書と情報を集めた広島記念文庫が設置されることを知らせてくれました。

広島は独自の平和の訴えをもった類まれな都市で、私達は広島での経験から多くのことを得ました。私達は心から、友情と理解とを希求する他の人々と共に活動したいと望んでいます。全ての国家が戦争を回避するように、広島は平和の訴えを

伝えるためにたゆまず活動したいと望んでいます。

おねがい

本誌でご理解いただけたと思いますがWFCは大変多様な活動を行ってきました。これらの活動はすべて奉仕活動で成り立っていますがそれでも運営状態はいつも火の車です。平和への努力はみかえりが期待できないからです。どうかWFCが将来も存続できますよう温いご援助をお願いいたします。

尚、平和を望む方は、どなたでも会員になっただけです。

年会費

- 学生 二千円
- 一般会員 三千円
- 賛助会員 五千円以上
- 特別会員 一万円以上
- 一般寄附 多少にかかわらず

郵便振込みにてご送金の場合は「広島二六〇三〇」ワールド・フレンドシップ・センター
〒七三四広島市南区翠町五丁目八一二二二
(☎) 六三三(五二九)へ。

英國の桂冠詩人である、ジョン・メースフィールドは大學を訪れるのが非常に好きでした。かつて、ケンブリッジ大學のキャンパスを去るとき、彼は振り返り、「すばらしい大學を見ることほど感動的なことはほかにない。ツタに覆われた壁は信頼感と永続性を暗示し、博學の教授陣は自信を感じさせ、若々しい学生達は夢と希望を連想させる。」と言ったことがあります。

もしメースフィールドの言葉を言い換えるならば、国際舞台でワールド・フレンドシップ・センターの意圖と理想ほど我々を奮い立たせるものは無い、と言えるでしょう。規模はあまり大きくありませんが、現代の最も大きく最も切迫した問題世界平和の達成に果敢に立ち向っています。これには幾つかの理由があります。まず第一に、パーバラ・レイノルズ女史、原田 東眠博士をはじめとする創設者達が崇高な動機と目標を持っていたこと、第二に、献身的な理事會が、時間とお金を快く惜しみなく提供してくれる職業・宗教・事業・教育・中当局の高い階級の人々で構成されていること、第三に、広島市の指導的市民が、その理念を全面的に支持していること、第四に、当センターは、平和の君（イエス）、マハトマ・ガンジー、アルバート・シュバイツァー博士らによって唱えられたように、國內及び國際問題を解決する際、非暴力主義に徹しているということです。

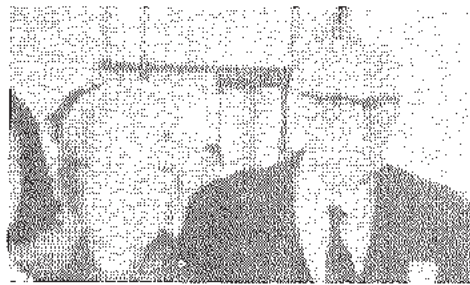
ワールド・フレンドシップ・センターが、最初に原子爆弾が投下された広島に設置されているということは、申し分のないことです。広島逗留の間、我々は、しばしば平和公園を訪れました。そ

こで、我々は畏敬の念を持って慰靈碑の前に立ちました。聡明かきと悲しみのうちに頭をたれ、我々の軍部が投下した爆弾によって殺戮された多くの罪なき人々と、永久にいえることのない傷を負った人々に思いをよせました。

我々は日本人から反感と増悪をかうかも知れな

聞くべき声

アイラとメーベル・ムーモウ



いと思ったのですが、反対に、最大限の好意と親切に接するばかりでした。我々は、日本人が熱心に平和と善意に満ちた世界を築こうとする心にとりわけ感銘を受けました。例えば、大企業の若い管理職、三〇名に講演するよう招かれたときのことでした。何について話しましょうかと我々が

開くと、答えは、「あなたがたはインドを訪れています。マハトマ・ガンジーによって提唱された非暴力主義のもつ力について話されてはどうでしょう。」というものでした。

上述しましたように、ワールド・フレンドシップ・センターは現代の最も緊急を要する問題を取り扱っています。一方で、世界の軍事大国は、何度も繰り返し人類を絶滅させることのできる核兵器を貯えています。それらの核兵器は、世界中いたる所を不毛にし、居住不可能にすることができ、世界は年間約四千億ドルの割合で、富を軍事費として浪費しています。工業先進國と第三世界諸國間の経済格差はますます広がる一方です。世界人口の約二〇%がいかだに乗って貧困と政治不安の海を漂っているのです。世界の飢餓と貧困は深刻化してきています。

死ぬ間際にアーノルド・トインビーは、「政治的・軍事的安全は、最も強力な軍隊を持つ國にもたらされるのではなく、抑圧・貧困と闘っている第三世界の大家と連帯のできる國々にもたらされる時代に我々は入っている。」と忠告しました。飢餓・貧困・健康・住居・政治不安の世界的諸問題は、困々が富を軍部や戦争に浪費している限り解決されません。

世界がトインビーの理想を實現するには、まだまだなすべきことがたくさんあります。長い間、人々は自分達の安全を國防省（ペンタゴン）と政治家に頼り過ぎたのです。現代の問題はあまりにも複雑で危険なので、軍部及び政治家だけにそれを委ねることはできない、ということは今や明白

日本での一年

— 1975年～1976年 —



レオナ・ラウ・エラー

です。平和教育を包括的に進めていく必要があります。まず、ワールド・フレンドシップ・センターは、その図書館、セミナー、ゲストの行き来を通じた奉仕活動によって大いに貢献することが出来ます。当センターと「友愛」(WFCの機関誌)は影響力のある、高く評価される声を有しています。その声が、数年後にますます大きくなっていくことをお祈りします。

日本での一年。何と素晴らしい一年だったことでしょう。外国で過ごした一年が、これほどまで人の生活を変えようとは誰が考ええたでしょう。一年間ワールド・フレンドシップ・センターで起った様々な出来事は私の出会った日本人の生活には大きな影響を与えなかったかもしれませんが、私の生活に与えた影響力は計り知れません。最初に、一年間に行なった活動のうち、いくつかを順を追って説明させていただきます。そうすれば私の生活に及ぼされた影響がどんなものか簡単にわかっていただけるでしょう。

ワールド・フレンドシップ・センターには、私が到着する前五ヶ月間、館長がいまませんでした。先の館長シャーロット・彼孫は、I・W・ムーウがアメリカへ帰国した後、原爆病院への訪問を続けていました。私の到着後もその原爆病院訪問は、ずっと続けていくことになりました。

理事会は、私の通訳兼秘書として大学生の竹内みちこ嬢を採ってくれました。みちこの目、耳、声を運して日本人の習慣を知り、愛するようになるとはなんと幸せだったことでしょう。みちこは聡明で、気のつく人だったので、仕事の計画立案・調整を十分に行なってくれました。問題があれば、理事会や、近くに住んでいる彼女の両親に援助を求めてくれました。

センターをきれいに、人をひきつけるようにしたり、生花、パン・クッキー作りの教室を運営したり、毎週原爆病院を訪問したり、中高生と成人に英語を教えたり、外国のゲストと一晩平和について討論するというふうに充実した日々を過ごし

ました。毎月、特別ゲストを招いてワールド・フレンドシップ・ナイトを開催しました。

最も楽しくかつためになる活動は、日曜午後の集りでした。その集りは大学生、高校生、そして教人の会社員から成り、世界初の原爆投下の糸口となった戦争の間に実際に起ったことを学びはじめました。私達は、被爆者が描いた絵画集「忘れ得ぬ炎」を知り、それを討論の題材として使いました。それから絵の説明を日本語から英語に翻訳する仕事をはじめました。やがて私達のやっていることが理事会に伝わり、これがテレビ局NHKと日本語による絵画集の印刷集に伝わりました。彼らはセンターにやってきて、英語訳を完成させるよう申し入れました。私達は英語訳を完成させました。その結果、日英両語による小さな絵画集ができあがりました。

この経験の副産物として、別に二つのプロジェクトが完成しました。絵画集の絵から、英語を台本とし、被爆者にナレーションをやってもらってスライドを作りました。そのスライドはアメリカで平和団体によって広く使われています。

宣教師の妻子から成る、日英両語が話せる翻訳チームが来広し、著名な教授、ジャーナリスト、医師、平和運動家達と会見しました。私の離日後このチームは、平和関係資料の翻訳の仕事に従事しました。

私は一九七六年六月に、一アメリカ人として、また一被爆者として離日しました。私達があの小絵画集の序文「何故アメリカ人は八月六日以前に広島を爆撃しなかったのか」という問い、それに対

する「原爆の詳細な影響を正確に調べるため広島を爆撃機撃つてはならない」とアメリカ軍が指令した」という答えを翻訳した時、私が抱いた感想を決して忘れることはないでしょう。

私には新しい家族がいます。一週間たつたかないうちに、私の日本での経験の一部は新しい人、または新しい機会に、平和の為に証言する案

世界友愛センターでの私の経験

モーリン・パーカー



すばらしき歓迎
広島に在る世界友愛センターでの私の経験について
書くことは大きな喜びです。

一九七七年四月十七日、

私は空航まで二台の車に乗って迎えにきて下さった、笑みをたたえた世界友愛センターの会員からすばらしく暖かいもてなしを受けた後、センターに向いました。明るい色の花で飾られ、大きな文字で「ウエルカム」と書かれた幕がセンターの玄関にかけられていました。私は人生でかつてこれほど自分が歓迎されていると感じたことはありませんでした。原田医師、永末栄子、田城明、原

内役をつとめます。一九七九年のクリスマスイブジョン・C・エラーとの結婚式に私の広島の友人が二人も出席してくれました。今、ジョンも私も日本と絆が結べたことを喜んでいます。

清、松原美代子、木戸マサ子、外田美智子、中尾宣爾、景山淳子、小倉繁、メアリー・マクミランシャーロット・煤磯、加藤新一、その他の人々。それはすばらしい歓迎でした。

私は、一九七七年四月十七日から一九七八年九月一日までWFC（ワールド・フレンドシップ・センター）の館長として勤めました。新館長のスタン・パトラーが一九七八年九月一日に着任しました。しかし、やり残したある特別の計画がありましたので原田理事長の許しを得てWFCにとどまりその仕事にあたりました。

自分にふさわしい場所

私の館長在職中、次のことをやりました。一九七七年八月に広島・長崎に於ける被害と後障害に関する国際シンポジウムに参加しました。私は原爆被害の恐怖と被爆者の苦しみについて多くのことを学びました。私は一九四五年八月六日にアメリカでラジオからその報告を聞いた時から被爆者に同情していましたが、彼らに直接会って話を聞き私の心は痛みました。私は自分がいるべきまさにその場所にいると感じました。私は自分が、私

にふさわしい場所で私のなすべきことをしていると感じました。

ある国、例えばアメリカ合衆国、ロシア、フランス、中国または他の国が核実験をすると、広島市民のグループが平和公園にある記念碑の前で正午一時間座り込みをします。私はこの座り込み行事前に知らされていた時、何度か参加しました。ここでも私は自分がそこに居るべき所に居るというのを感じました。私が他のすばらしい仲間と照りつける太陽のもとでそこに座っている時、あの深い感情——自分の居るべき所にいられることを神に感謝する気持ち——が起りました。私は言葉の壁のためお互に話すことはできませんでしたが、もっと深いレベルの交流がありました。

ノーモア・ヒロシマのために

ワールド・フレンドシップ・センターにいる時は、ヒロシマと原爆投下について学びに来た宿泊者の方々に迎える側として尽しました。私達はしばしば被爆者の描いた絵からつくられたスライドを彼らに見せました。また彼らの質問に答え、「ヒロシマの悲劇をくり返すな」ということを説得できるよう努めました。私達は度々彼らを平和公園に案内しました。ゲストが宮島・広島城・縮景園等に行けるように地図をさし上げたり、説明をしたりしました。

週に一度、原爆と放射能の後遺症に苦しむ人々が治療を受けている原爆病院の患者さん達に本の回覧サービスをするために、永末栄子、後には妹尾かほりと共に行きました。一人のアメリカ人と

してこれらの人々が私の国の政府の行為により悲しい、死んでゆくを見るのはとても耐えがたく罪深く感じました。しかし患者さん達は大変快く親切に接して下さいましたので、私は間もなく罪深い気持ちを克服しました。とはいえ、私はノーモアヒロシマを実現するために私の力の及ぶ限りのことをする、という誓いをすてることはありませんでした。私は被爆者看護ホームも訪れました。それは美しい場所です。私はそこに平和人形（紙でつくる日本人形）のつくり方を、私達に教えて下さった竹内千代さんと共に行きました。

一九七七年十月に京都のフレンズワールドカレッジの学生達や先生と韓国に行きました。私達のうち数名は、韓国人被爆者のための医療機関のあるハプチョンに行きました。この医療機関は、韓国政府からも日本政府からも援助を受けることのできない広島原爆の韓国人生存者のために、日本の平和運動によって建てられたものでした。私達は原爆が投下された時広島にいて傷を負った三人の年齢の婦人を訪れました。一人は盲目でした。全員とても陽気で喜んで訪問者を迎えてくれました。

英語を教える喜び

週に一度ワールド・フレンドシップ・センターで英語を教えました。日本で英語を教えることは喜びでした。学生達は学ぶことにも熱心でした。彼らは頭が良く知性があり、私の努力に感謝の態度をもち、私が話すことには何にでも興味を示しました。私は日本で英語を教えたという経験

をいつまでも大切にしよう。私はWFCによって発行されている機関紙「友愛」の英語版の編集を手伝いました。山手エリ子と田城明が「友愛」の日本語版の編集者でした。ウイリアム・ポールドウィンと私が「友愛」の英語版の編集者でした。皆で集まり「友愛」の語を整理するのは最高に楽しいことでした。私はまた週に一度手づくり会館で英語を教えていました。私は広島に於ける真に社会変革の活動家である岩谷和夫・久仁子・梶岡秀、その他の人々とそこで交わるのを楽しみにしていました。

特別な「企画」

館長としての私の任期が終った後、私は非常に特別な「企画」をやりました。ドリス・ハートマン宣教師が私に日本のキリスト教会名簿を借して下さいました。この名簿に載っていた数名の牧師に手紙で、妹尾かはりと私が、彼らの集会で被爆者の絵からつくられたスライドや「ヒロシマ・原爆の記録」という映画を上映できるかどうか問い合わせました。私達は鳥取に招待されることになり喜びました。一九七八年の十一月にスライドと映画を持って私達は鳥取に行き、八つの教会から集まった約三五名の人々にそれらを見せました。それはその地方の例会の時でした。映画とスライドには日本語の説明がついていました。その後討論に移りました。私が英語で話し、かはりが日本語に通訳しました。私達はとてもよい反応を得ました。その場にいた人々は私達に、映画やスライドを見せながら日本中をまわるべきだと言いまし

た。しかしながらその後、他の所からの招きを得ることができませんでした。将来WFCの館長になる人々が映画とスライドを持って日本をまわる仕事を続けて下さればすばらしいと思います。映画は平和文化センターから借りることができます。キリスト教の伝道師の方達の中に教会名簿を持っている人がいます。もちろん、興味を示す他のグループもたくさんあります。私達もとても驚いた事ですが、日本人も広島や長崎の原爆投下についてはほとんど知らないのです。彼らは知らされる必要があります。また彼らは原子力発電所の危険性についても知らされる必要があります。

最も貴重な体験

私が広島の世界・フレンドシップ・センターで得た経験は、私の人生の最も貴重な経験です。私は日本人に対して大きな愛と尊敬をもつことを学びました。私は日本人は世界で最も責任感のある人々であると感じています。私は日本で私が得たほどの友情を今まで一度も経験したことがありません。私は全世界に核戦争の真の意味を、広島や長崎で経験されたそのままに理解させることを希望し折っています。

最後にあのすばらしい土地ですばらしい人達に囲まれて貴重な体験をする機会を私に与えて下さった原田理事長、永末栄子、バーバラ・レイノルズそしてWFCの全理事の方々から感謝いたします。

平和教育研究のための教師交換計画の一環として、広島の世界ド・フレンドシップ・センターは今年（一九八〇年）四人の教師をアメリカから招きました。私は光榮にも、その一人に選ばれました。

教師交換計画に参加して

フローレンス・デイト・スミス



私はオレゴン州ユージンに住む学習法専門家である今年夏一カ月半旅行した後、イリノイ州とカルフォルニア州から来た教師達と一緒に日本に着きました。七月八日に東京に着き、それから研究を始め、予想もしなかった事を色々学びました。多くの様々な人達が私達のホスト・ファミリーになつてくれました。独身の人もいれば大家族も、郊外に住む人達もいれば都会に住む人達もおり、アパートに住む人もいれば、一戸建ての家に住む人達もいました。皆さんが私達を親切にもてなしてくれて、私達はとまどうほどだったのです。私

達が気持ちよく、有意義に滞在できるように、時間努力、お金を全く惜しまずもてなしてくれました。何年も生きてきましたが、このような待遇は以前受けたことがありません。

それだけでなく、道や喫茶店で会った見知らぬ

人達も、とても親切にしてくれました。自から進んでカウンターに移って私のために良いテーブルを空けてくれる人など、アメリカのレストランでは見たことがありません。

日本をまわって色々な分野の教育関係者、教育委員会、文部省、教員組合の職員の方々、校長、教育長、そして色々な年齢の生徒達と会いました。平和団体のリーダーや創設者、医学関係の職員、教会の指導者、YMCA職員の方々とお会いできてとてもうれしく思いました。なかでも、渡爆者の方々から聞いたお話、賞を受けた原爆の影響に関する映画、広島平和祈念式典に強く感銘を受けました。

核実験に対する広島・長崎両市長からの抗議に對して、米国は何の反応も示したことがないのを知り、私の町の「平和選抜のための、新しい呼びかけ（The New Call to Pacemaking）」運動グループの署名付きあいさつ状を、一個人として贈りました。

広島での祈念式典で、バーバラ・レイノルズさん、WFPCの代表であるスタン・ペトラリさんと共に予約席に座らせて頂けたのも光榮に思っています。新聞やテレビで私達のその時の様子が報道されました。美しく、そして悲しい式の途中で、一五〇〇羽の鳩が放たれた時、私達は知らないうちに約三分間もテレビに写ったのです。その時、私達三人は何年も前のあの悲しい日に起ったことを思い、涙ぐんでいました。

原田先生にお会いして、ユージン・スプリングフィールドNCPから送られた旗をお渡しした時

には気分はもう落ち着いていました。

原子力拡張や防衛力増強のための米国からの圧力に、多くの日本人が関心を持っているのがわかりました。日本の学校では日教組に強く支持された平和教育のカリキュラムがあることも知りませんでした。全米教育協会が日教組の平和活動を認めて、今年の夏開かれた平和会議で日教組の活動を正式に承認したことも後になって読み知りました。

各団体と接触していると、人々があることに興味を持っているのがわかりました。彼らは、日本人の米国での生活について、また戦争中に彼らに何が起ったのか私に尋ねました。戦前、戦中、戦後に渡って日本人に対する屈辱的な差別はありましたが、状況が著しく良い方向に変化してきていることに教師になって気づいてきたので、そのことを確信を持って述べました。一九五九年にもなつて私は、米国中西部の郊外で職業を持つことができませんでした。しかし大学での素晴らしい訓練と良い友達のお陰で、一九六六年からは教師コンサルタントになりました。長い間一生懸命勉強すれば誰でもやがて認められ、良い結果が得られるだろうと私は若い人達に言いました。

米国での敵国人隔離収容所での二年間の生活は、どんなものだったか聞かれて、私が答えたのは、身体的よりも精神的に私には苦しかったということです。

私達は最初の数カ月間馬小屋で生活させられ、その後、兵舎に移されましたが、そこでは家族の一部歴しか割りあてられませんでした。その年の冬雪が降ったため、私達はタールを塗った紙の

上に断熱材を増やしました。牛のもつ、牛乳、パンが、収容者達により数カ月で育てられた米と野菜に添えられた食卓を思い出します。

小さなどんぐりがやがては大きな木の木になれるように、忍耐、慎ましき、努力、そして人間に對する愛情があればどんな困難にも平和的解決方法があるということを私は述べました。

日本の平和教育について知り、二〇才前後の人造と共に平和行進に参加した後、私は大人にも小供にも同様に世界平和のための指導者になり、戦争と軍備を否認する平和憲法を守っていくよう激励しました。WFCの活動を何度も心からはめたたえもしました。

教師交換計画の前に私が平和教育について学びたかった理由は山田島に落ちた原爆により親戚を失なったこと、収容生活を通して日米戦争の影響を個人的に知っていたこと、良心的参戦拒否者である夫が投獄されたこと、です。

私は多くのことを学び米国に帰ってきました。日本で何度もテレビその他報道インタビューをうけたので、マスメディアも前ほど恐しくなく、米国内で世界平和についての私の考えを訴えたいと思います。

今年の夏日本に行った私達教師が共同で撮ったスライドを公開できるように整理しました。広島市の活発な組織であるWFCを、また世界のための平和メッセージを各団体組織に広めていくため努力を惜しまないつもりです。

米田オレゴン州ユージン

キンケイド通り 三〇五五

(TEL・六八六一〇二〇二)

ワールド・フレンドシップ・センター
理事会名簿



- (理事)
- | | | |
|--------|--------|-------|
| 原田 東照 | 田代 明 | 原田 清 |
| 松原 美代子 | 美智子 | 宇 善安 |
| 森下 弘 | 深崎 敏之 | 妹尾かほり |
| 立山 道男 | 藤井 正一 | 大石 武司 |
| 竹内 千代 | ロバート& | 横田 王 |
| 米田 佳一 | アリス・ | 西村 和子 |
| 木戸マサ子 | ラムザイヤー | 鈴木信一郎 |
| 空 友美子 | 高松 昭博 | 中村 義博 |
| | 中尾 希嗣 | |
- (顧問)
- | | | |
|-------|-------|-------|
| バイバラ・ | 英 安島 | 高原 弘子 |
| レイノルズ | 迫 下代子 | 井上 壽志 |
| 相原 和光 | 加藤 芳一 | 若成 之夫 |
| パックス・ | 松本 卓夫 | |

編集後記

念願のワールド・フレンドシップ・センター十五周年記念友愛特別号を一年遅れましたが、みなさまにおとどけできてとてもうれしく思います。友愛センターは一九六五年八月創立以来多くの民間人の好意と努力により今まで継続してきました。十五周年を一つの区切りとしてその歴史をふり返り、センターのために御尽力下さった方々の足跡を記録することにより今後の展望と活動の縁となりますよう心から願っています。しかしながら過去センターに關ったすべての人々に關する記録を収録することはいろんな点で不可能で、この記念誌にはごく一部の方の原稿を掲載するのみとなりましたことをお詫びいたします。

記念誌発行に当り翻訳、編集その他貴重な時間をさいて御協力下さったボランティアの方々から心からお礼申し上げます。

編集委員会代表 妹尾 かほり

ワールド・フレンドシップ・センター

友愛

(FRIENDSHIP)

特別号 1981・春

広島 世界・フレンドシップ・センター
理事長 原田 東照
住所 広島市南区翠町5丁目3-22
TEL 広島(0822)51-5529
郵便 1部 500円
振替番号 広島26030